

か が み と み よ 加 賀 美 常 美 代

| | |
|---------|--------------------------------------------------------------------------------|
| 学位の種類 | 博士(文学) |
| 学位記番号 | 文博第 189 号 |
| 学位授与年月日 | 平成17年3月10日 |
| 学位授与の要件 | 学位規則第4条第1項該当 |
| 研究科・専攻 | 東北大学大学院文学研究科(博士課程後期3年の課程) 人間科学専攻 |
| 学位論文題目 | 多文化社会における葛藤解決と教育価値観 |
| 論文審査委員 | (主査) 教授 大 淵 憲 一 教授 畑 山 俊 輝 教授 仁 平 義 明 教授 行 場 次 朗 教授 才 田 い ず み |

論文内容の要旨

平成15年度の外国人登録者数は195万人を超え、過去最高となった。これはわが国の総人口の1.5%を占め(法務省入国管理局、2003)、異文化接触が日常化してきていることを物語っている。このように、近年、外国人登録者数が増加の一途をたどってきており、外国人に日本語を教える教師は28,511人、日本語学習者は135,146人となり、学習者の中でも専門的な日本語学習を目的とする留学生、就学生(ここでは、総称して留学生とする)が大半を占めている(文化庁、2003)。

このように、日本社会のグローバル化が進行する中で、日本人教師と留学生が接触する教育場面では、様々な解決困難な葛藤が散見されている。こうした葛藤解決を困難にしている一因には、教師の授業スタイルや留学生への接し方などが留学生の母国の方法と異なることが考えられる。異文化間葛藤では、価値観や慣習の違いから一方が適切と思っ行う行動が他方にとっては我慢できないものと知覚される場合も多い。こうした状況では、日本人同士の場合のように暗黙のルールや期待は通用しないので、しばしばその解決は困難で、その結果、葛藤が教師と留学生の関係に亀裂を生じさせることも少なくない。

そこで、本研究の目的は、異文化間の教育場面で生じる日本人教師と留学生との葛藤の原因と解決行動のメカニズムを探り、日本人教師と留学生の葛藤の原因帰属と解決方略との関連、解決方略と教育価値観との関連について、実証的に検討することである。本研究では、異文化間の教育場面における葛藤の背後には教育価値観が存在することを仮定しているため、葛藤問題を分析するにあたり、現実場面で収集した事例をもとに作成したシナリオ法を用いたこと、さらに、教育価値観尺度の開発と測定をもとに実証的な調査方法を用いて分析していることが特徴である。

本論文は、目次で示すとおり、全8章から構成される。

第1章では、ここ20数年の日本における留学生政策を含めた在日留学生の受入動向と量的目標を達成した現状を論じた。在日留学生研究の背景となる理論として、カルチャー・ショック、異文化適応関連のUカーブ仮説、Wカーブ仮説、異文化受容態度の類型モデルを概観し、さらに、アメリカの人種隔離政策を撤廃する上で論理的根拠となった接触仮説についての研究動向を概観した。現在の留学生研究については、在日留学生の抱える問題を相談事例による研究から検討し、在米留学生の抱える問題にも触れ、受入社会の文化的背景は異なるものの、青年期の発達課題やキャンパスでの生活上の問題など留学生としての共通する問題を指摘した。一方、留学生に関する調査研究については、留学生が自分自身をどのように見ているかという視点、日本人をどのように見ているかという対人関係の視点、留学生の問題をどのように解決するかという対処の視点、どのように適応し、援助を得ているかという視点、留学生のホスト社会への影響という視点から概観した。

これらの研究から、留学生に関する研究は日本社会への適応と援助に関するものが大半を占め、対人関係の研究が僅少であることを示した。さらに、留学生が現在、どのような接触状況におかれているか、また、彼らを取り巻く日本人との相互作用の結果、どのような葛藤が生起され、葛藤にどう対処しているかという研究はほとんど見当たらない。現在、外国人登録者数が過去最高となり、急速なグローバル化の進展する中で、日本における留学生と日本人の異文化間葛藤研究は、日本社会で外国人と日本人がどのように共存し生きていくかという多文化社会における重要な社会心理学的課題であることを指摘した。

第2章では、本研究における葛藤について、期待していることが妨害されていると関係者が認知することであると定義し、葛藤の特徴、生起過程を論じた。葛藤解決方略については、多様な対立する相互作用における一般的傾向、類型化された反応の仕方を示すものと定義し、葛藤解決方略の分類について次元モデルと類型モデルを概観し、葛藤解決方略を規定する心理学的要因である帰属に注目し研究動向を論じた。

次に、本研究における文化の定義を明示し、葛藤解決方略における文化差、原因帰属、異文化間葛藤の比較研究を概観した。日米の葛藤比較研究では個人主義、集団主義の枠組みから方略の差異を説明する研究が主流であったのに対し、日本における異文化間葛藤研究ではマジョリティとマイノリティの行動規範の不一致や社会的地位や役割による勢力差との関連が示唆された。

そこで、葛藤方略の背後にあると仮定される価値観について定義し、社会心理学におけるRokeach、Hofstede、Chinese Culture Connection、Schwartzたちの一般的価値観に関する研究動向と価値尺度を概観した。Hofstede、Chinese Culture Connection、Schwartzの価値次元から、主要な価値観研究の共通次元である自律性（個人の自主と自由を強調する）、保守性（社会秩序と調和的人間関係を重視する）、支配性（序列的人間関係を容認する）、平等性（人々間の平等を重視する）の4次元を示した。

次に、教育価値観を望ましい教育のあり方について人々が抱えている信念の集合体とし、一般的には、よい教師、よい学生とはどのような人か、よい教え方とはどのようなものかなどに関する信念と定義した。さらに、教育価値観は、理想的教師観、理想的学生観、理想的教育観の3領域から構成されることを示し、この3領域ごとに関連研究を概観し、Hofstede、Chinese Culture Connection、Schwartzたちの一般的価値観と本研究の教育価値観との関連について述べた。

本章で見出された葛藤方略における比較文化研究のこれまでの問題は、同文化内の葛藤方略の比較が中心であり、異文化間における葛藤方略の比較はほとんど行われてこなかったこと、異文化間比較を行う場合には、集団主義、個人主義の枠組みだけでは説明しきれないこと、集団主義といわれる国同士（中

国や韓国などのアジア諸国)の比較があまり行われてこなかったことが挙げられた。

本研究の対象者である異文化間の教育場面(ここでは広く教育場面で生じた日本人教師と留学生の葛藤を扱うこととする)で起こる葛藤の多くは、日本人教師とアジア系留学生を含むものである。したがって、教育場面における葛藤解決には、教育価値観を導入し検討することが重要であることを示唆した。

そこで、第3章では、教育価値観の理論的カテゴリーと項目の収集を行い、教育価値観の3領域(理想的教師観、理想的学生観、理想的教育観)の次元と構造について、理論的分析を元に項目を選抜した。まず、日本人教師と留学生の葛藤解決行動の背後にある教育価値観の違いに注目した研究が必要だと考え、教育価値観の内容を理論的に分析し、測定する尺度の開発を行った。対象者である日本人日本語教師36名、10か国の留学生25名、日本人学生15名の自由記述と第2章で概観した関連文献から、教育価値観の理想的教育観、理想的学生観、理想的教育観の3領域の項目を収集した結果、192項目が得られた。次に、それらを分類し、整理した結果、理想的教師観は6次元16項目、理想的学生観は4次元10項目、理想的教育観は6次元19項目の合計45項目にまで選抜した(研究1)。

第4章では、第3章で理論的枠組みに基づいて項目を収集して作成した45項目の教育価値観尺度を日本人学生193名を対象に実施した。因子分析を行った結果、理想的教育観では4因子(熱意、専門性、学生尊重、教師主導)、理想的学生観では3因子(学習意欲、規則遵守、従順)、理想的教育観では5因子(文化的視野、人材教育、自主独立、社会化、創造性)の12因子が抽出された。さらに、この因子分析結果を元に、因子負荷量と内容的妥当性を検討し、教育価値観尺度を作成した。その結果、理想的教師観(熱意、専門性、学生尊重、教師主導)の4下位尺度、理想的学生観(学習意欲、規則遵守、従順)の3下位尺度、理想的教育観(文化的視野、人材教育、自主独立、社会化、創造性)の5下位尺度の45項目を作成した(研究2)。

次に、この教育価値観尺度を日本人教師84名、日本人学生306名、中国人学生214名、韓国人学生154名を対象に施行し、彼らの間で比較を試みた。日本人教師は、学生の学習意欲と自主独立、教育の文化的視野を重視しているものの、学生の自由意志などの創造性はあまり重視しない傾向が見られた。日本人学生は、規範遵守や社会化という保守性を重視しつつ、自主独立や創造性という革新性を重視していた。つまり、次元は異なるものの、日本人は二律背反的な教育価値観を持ち合わせていた。中国人学生は、熱意、従順、社会化、人材教育を重視しており、明確で一貫した教育価値観を持っていた。韓国人学生は教師主導を重視し、理想的学生観、理想的教育観に関しては他の3群の中間に位置していた。このことから「複合的教育価値観」を持つ日本人、「単一的教育価値観」を持つ中国人学生、「中間的教育価値観」を持つ韓国人学生というアジア3か国の教育価値観の3類型が見いだされた(研究3)。

研究4では、簡便さと利便さの観点から短縮版教育価値観尺度の作成を試みた。研究2の対象者である日本人学生193名の因子分析結果から、因子負荷量と内容的な妥当性を吟味しながら、45項目から3分の2程度までの31項目に減らした。45項目の教育価値観尺度と31項目の短縮版の12下位尺度は、それぞれ高い相関が示された。

研究5では、教育価値観に関して評定法と分析方法を変えて学生集団の比較を行うために、中国人学生129名、韓国人学生130名、日本人学生165名を対象に、短縮版教育価値観尺度を施行した。判別分析を行った結果、研究3の分析結果と基本的に同じ傾向を見出すことができた。

研究5において行った判別分析の結果は、3領域の次元のいくつかの一つの判別次元に高負荷を示した。このことは、それらの次元が独立しておらず、相互に連動している可能性があることを示唆している。そこで、研究6では、研究5と同じ対象者に対し、領域横断的に12下位尺度の上位因子分析を行っ

た。その結果、自己実現的価値（専門性、自主独立、学習意欲、熱意）、自由主義的価値（学生尊重、創造性）、伝統（権威）主義的価値（教師主導、規則遵守、従順）、社会貢献的価値（人材育成、文化的視野、社会化）の4つの包括的上位因子が抽出された。この包括的上位因子の判別分析の結果から、日本人学生は、自己実現的価値、自由主義的価値を重視し、中国人学生は、伝統（権威）主義的価値を重視していたことが示された。また、韓国人学生は、2群の中間に位置していたことが見出されており、3学生集団の特徴と差異が研究5で行った12次元の判別分析の結果より明確に示された。

最後に、Schwartzたちの一般的価値次元と教育価値観の包括的価値次元との関連について検討を行った。一般的価値次元の保守性、支配性は、伝統（権威）主義的価値の教師主導、規則遵守、従順の価値次元に対応すると考えられる。また、一般的価値次元の平等性は、自由主義的価値の学生尊重と創造性の次元に対応すると考えられる。このように、伝統（権威）主義的価値と自由主義的価値は、一般的価値次元との共通性が見出された。一般的価値次元の自律性の次元は、自己実現的価値のうち、自主独立、学習意欲の次元に対応すると考えられるが、自己実現的価値の一部である専門性、熱意の次元は、一般的価値次元と対応しない。また、社会貢献的価値次元の人材育成、社会化、文化的視野の次元も、一般的価値次元と対応せず、これらの価値次元は、一般的価値研究者がこれまで取り上げなかった価値次元と言える。このように、一部の自己実現的価値次元、社会貢献的価値次元は、一般的価値次元との相違性が見出され、これらの2次元は教育価値次元の独自性といえる。

第5章では、まず、日本において、日常的に異文化接触頻度が高い日本語教育場面の日本人教師と日本語学習者の現状と教育現場の持つ特徴について概観した。次に、日本人の日本語教師84名を対象に、葛藤内容と葛藤解決過程について自由記述方式の質問紙調査を行ったところ、43事例の回答を収集した。事例の内容分析を行った結果、①日本語教師が認知する留学生との葛藤内容を8カテゴリー（学生の抗議・主張、授業不参加、教室内規範違反、学習困難、学習意欲の欠如、明白なルール違反、暴力行為、教室場面以外の問題）に分類した。②教師の原因の認知は、留学生側及び文化や環境への外的帰属傾向が高かった。③教師の葛藤解決行動については、対話や説得などの双方向の方略、対決や服従などの一方向的な方略、教師や学生の第三者介入など多様な方略が選択されていた。しかし、教師の葛藤解決行動後の自己認知は否定的であった。以上から、日本語教育場面における教師が認知する教師と学生との葛藤内容と原因帰属、解決方略の概念枠組みを導き出した（研究7）。

第6章では、日本人日本語教師84名、中国人学生214名、韓国人学生154名を対象（研究3と同じ対象者）に、日本語教育場面における葛藤の原因帰属と解決方略の関連を検討した。階層的重回帰分析の結果、留学生は葛藤原因を教師要因に帰属させたときは対決方略を選択し、学生要因に帰属させた場合には協調方略を選択していた。このことから、帰属は学生の解決方略を規定しているといえる。また、文化要因への帰属は、中国人学生には協調や服従といった宥和的方略を促したが、韓国人学生は回避方略を用いない傾向が見られた。また、日本人教師による予測との比較から、異文化間葛藤解決の特徴が見出された。日本人教師の予測は学生の反応と一致せず、特に対決方略についての認識にズレが大きく、これが異文化間葛藤の解決を困難にする一因と思われる（研究8）。

第7章では、教育価値観と葛藤解決方略の関連を明らかにするために、日本人学生165名、中国人学生129名、韓国人学生130名を対象（研究5と同じ対象者）に、質問紙調査を実施した。葛藤解決方略の選択が自己実現的価値次元、伝統（権威）主義的価値次元、自由主義的価値次元、社会貢献的価値次元という包括的価値次元によって影響を受けるかどうか、学生集団間で異なるかどうか、階層的重回帰分析を行い検討した（研究9）。その結果、自己実現的価値を重視する学生は、服従、協調方略を選択し、対決方略を選択しない傾向が見られた。また、伝統（権威）主義的価値を重視する学生は、対決方略を選

択することが示唆され、この傾向は韓国人学生に強く見られ、中国人学生に弱く見られた。さらに、日本人学生でこの価値を重視する学生は、対決方略をとらない傾向が示された。

第8章では、まず、本論文において論じた研究1～9の研究成果について述べた。次に、当初の研究課題の観点から総合的な考察を試みた。本研究の研究課題は、異文化間の教育場面において教師と学生の葛藤の原因帰属、解決方略、教育価値観とのメカニズムを探り、それらの要因の関連を明らかにするということであるが、研究7、研究8、研究9の結果を中心に、原因帰属、葛藤解決方略、教育価値観の関連について推論を含めながら、全体的な解釈を試みた。自己実現的価値を重視する学生は、協調方略をとる傾向が見られたが、その原因は彼らが葛藤を学生に帰属させるためではないかと解釈できる。その理由としては、第1に、自己実現的価値を重視する学生は、専門家としての教師を尊敬しているので、問題が起こったときは、教師よりは自分の側に非があると考える傾向があるのではないかと推測できる。第2に、自己実現的価値には学生自身の学習意欲を重視する面も含まれている。そのため、教育場面で自分自身の学習上の努力が重要であると感じている学生は、教師との葛藤においても、問題を自分自身の努力不足によるものとみなす傾向があるのではないかとと思われる。したがって、自己実現的価値を強く持つ学生は、葛藤の原因を教師に帰属させるのではなく、学生自身に帰属させることで、協動的な方略によって葛藤問題を解決しようとする建設的な姿勢を持つことができるものと考えられる。

一方、伝統（権威）主義的価値を重視する学生で、特に、韓国人学生、中国人学生は、教師との葛藤状況において対決方略をとる傾向が見られたが、それは彼らが葛藤原因を教師に帰属させるためではないかと推測される。その理由としては、第1に、教師の威厳と教室規範を重視する伝統（権威）主義的価値は、権威主義的な態度を含んでいるため、権威主義的な人は外集団成員に対して批判的な傾向がある（Scodel & Mussen, 1953）ことが考えられる。したがって、日本人教師を外集団成員と見なし、問題の原因が教師側にあるという批判的認知を強く持った可能性がある。第2に、伝統（権威）主義的価値を重視する学生は、教師に対して保護や依存を求める傾向がある。教師との対立は、彼らのそのような期待に反する出来事なので、その分より強く反発することが考えられる。教師との間で葛藤が起こると、学生たちは自分たちが教師に対し恭順であるにもかかわらず、教師は自分たちを十分に保護してくれないと感じ、これが教師への原因帰属となるのではないかとと思われる。そのため、教師に原因帰属することで対決方略をとったのではないかと解釈できる。

また、学生たちは葛藤の原因を教師に帰属させるとき、対決方略を選択していたが、教師はそれを予想外だと受け取る傾向があった。そのような場合、教師はうまく対処する準備ができておらず、その結果、学生に対する怒りや不満を持つと同時に、自己に対しても無力感を感じる人が多いと思われる。一方、教師に対して対決的な姿勢をとる学生は、主観的には追い詰められている気持ちになっていることが多いので、教師がそれを適切に受け止められないと、葛藤はこじれて教師と学生との関係は悪化する可能性もある。

さらに、葛藤に対する教師の学生への対処に関しては、葛藤そのものを否定的に捉えず肯定的機能を認識することを示した。万が一、葛藤状況に遭遇した場合、教育価値観の違いを念頭に置き学生と関わることで、葛藤において消極的な方略をとる学生に対しては、積極的な働きかけが必要であることを示した。また、葛藤に対し対決的な行動を取る学生で個人的問題を含む場合は、秘密保持と教師の対処の限界を知り、専門家との連携をとること、何よりも教師が葛藤に対し、感情的にエスカレートさせないことが重要であることを取り上げた。このように、葛藤がもたらす教室活動への活性化などの肯定的、自己成長的機能を認識し、学生理解と協動的解決に生かす工夫が必要であることを示唆した。

最後に、本研究の意義と知見が異文化間の教師教育にどのように活用可能かという点について述べ

た。本研究の第1の意義は、教師の葛藤事例の内容分析から、これまで茫漠としていた日本語教育現場における教師の葛藤解決過程の全体像を示し、葛藤内容を分類したことである。その結果、教師は葛藤解決行動が意識化されておらず、学生に対決行動を予測できないことが示された。このことから、葛藤事例の検討など教師が問題解決を擬似的に体験でき、葛藤対処スキルを学習する教師教育の機会が必要なことを述べた。本研究の第2の意義は、教育価値観を測定するための尺度を開発し、簡便に教師自身の価値観と多様な文化背景を持つ学生に対し、客観的な測定基準を示すことができたことである。第3の意義は、葛藤状況の背後にある教育価値観を知ることで、自分の持つ教育価値観がどのように教室運営、教室内規範、教育内容、学生理解、教育評価などに影響を与えているか検討できることである。このことから、教師と学生との教育価値観がどのように異なるか検討する際に有効な手立てとなる。このように、教育価値観尺度を学級運営に活用することで、教師と学生との人間関係を検討する上で有効なツールとなることを示唆した。

以上のように、総合的考察を試みたが、今後は、一般的価値次元と教育価値次元との関連について実証的に検討し、教育価値観尺度の精緻化を行うとともに、ムスリム学生や欧米の学生など多様な文化的背景を持つ対象者に広げて、多文化における教育価値観の比較と尺度の有効性について検討することが重要課題である。また、小学生、中学生、高校生、成人など多様な世代を対象に、学校教育や生涯教育の観点から教育価値観を検討する必要がある。このように、比較文化的な視点だけでなく発達視点を加味した教育価値観研究に拡大していき、より多様な教育現場に教育価値観が適用可能かを検討する必要がある。

論文審査結果の要旨

近年、外国人登録者数が増加の一途をたどり、中でも、日本語学習を目的とする留学生・就学生の増加が著しい。日本が多文化社会に移行しつつある中で、日本人教師と留学生が接触する教育場面では解決困難な葛藤がしばしば生じるが、その背景には教育に対する姿勢や慣習の違いが存在すると考えられる。本論文の目的は、異文化間の教育場面で生じる日本人教師と留学生との葛藤の原因と解決行動のメカニズムを探り、原因帰属と解決方略との関連性、また、その背後にある教育価値観との関連性について実証的に検討することである。

本論文は全8章から成るが、第1章において論者は、在日留学生研究の枠組となる理論として、カルチャー・ショック、異文化適応関連のUカーブ仮説、Wカーブ仮説、異文化受容態度の類型モデル、さらに、アメリカの人種隔離政策を撤廃する上で論理的根拠となった接触仮説などに関する研究動向を概観する。また、日本における留学生に関する過去の調査研究を精査し、留学生の自己像と日本人像、留学上の諸問題への対処、日本社会に対する適応、留学生の日本社会への影響などの観点からそれらの知見の意味について議論した。

第2章では、葛藤の社会的過程、特に葛藤解決方略に関する理論と研究をレビューした。葛藤解決方略の理論として次元モデルと類型モデルを取り上げて詳細に論じ、一方、葛藤解決方略に影響を与える心理学的諸要因の中で原因帰属に注目した。次に論者は、葛藤解決方略に関する文化差や異文化間葛藤の比較を含む実証研究を概観した。日本を含む葛藤比較研究では個人主義・集団主義の枠組みから葛藤反応の差違を検討する研究が多く見られたが、さらに、異文化間葛藤にマジョリティ・マイノリティ問題の視点を導入することが有益であるといった示唆が得られた。

異文化間葛藤方略の背後には異なる価値観があると考えられる。社会心理学におけるRokeach、Hofstede、Chinese Culture Connection、Schwartzたちの社会的価値理論とそれらを測定するために開発されてきた価値尺度、また、それらを用いて行われた実証研究をレビューした。それらの作業を通して、論者は主要な価値観理論に共通する次元があることを指摘し、それは自律性（個人の自主と自由を強調する）、保守性（社会秩序と調和的人間関係を重視する）、支配性（序列的人間関係を容認する）、平等性（人々間の平等を重視する）の4次元であると論じた。

更に論者は、留学生を含む教育場面での葛藤問題を理解するには教育価値観の理解が不可欠であると主張する。教育価値観とは望ましい教育のあり方について人々が抱いている信念の集合体であり、よい教師、よい学生とはどのような人か、よい教え方とはどのようなものかなどに関する信念である。ここで論者は、教育価値観が理想的教師観、理想的学生観、理想的教育観の3領域から構成されると仮定した。

第3章では、教育価値観を測定する尺度を新たに開発するために、日本人日本語教師、10か国の留学生、日本人学生などからの自由記述と文献調査から、3領域において合計192の価値項目を収集した。それらを分類・整理して、理想的教師観16項目、理想的学生観10項目、理想的教育観19項目、合計45項目からなる教育価値観尺度を作成した（研究1）

第4章では、この尺度を日本人学生193名に実施して因子分析を行い、理想的教育観4因子（熱意、専門性、学生尊重、教師主導）、理想的学生観3因子（学習意欲、規則遵守、従順）、理想的教育観5因子（文化的視野、人材教育、自主独立、社会化、創造性）の12因子を見いだした（研究2）。次に、この尺度を日本人教師84名、日本人学生306名、中国人学生214名、韓国学生154名に施行して集団間の比較を試みた。日本人教師は、学生の学習意欲と自主独立、教育の文化的視野を重視しているものの、学生の自由意志などの創造性はあまり重視しなかった。日本人学生は、規範遵守や社会化という保守性を重視しつつ、自主独立や創造性という革新性を重視するという「複合的教育価値観」を示した。中国人学生は、熱意、従順、社会化、人材教育を重視し、明確で一貫した「単一的教育価値観」を示した。韓国学生は教師主導を重視し、理想的学生観、理想的教育観に関しては他の3群の中間に位置するという「中間的教育価値観」を示した（研究3）。さらに、論者は項目数3分の2の短縮版を作り（研究4）、別の対象者集団を使って（中国人学生129名、韓国学生130名、日本人学生165名）、それら集団間の違いを判別分析によって検討したところ、ほぼ同じ結果が得られた（研究6）。このように、論者は、尺度、標本、分析方法などを変えて繰り返し検討を行い、教育価値観に関するアジア人学生の違いを明確にした。

判別分析は3領域12次元に対する回答者の反応にいくつかのパターンがあることを示したが、これは上位因子の存在を示唆するものである。そこで論者は、12因子を変数とする上位因子分析を行い、自己実現的価値（専門性、自主独立、学習意欲、熱意）、自由主義的価値（学生尊重、創造性）、伝統主義的価値（教師主導、規則遵守、従順）、社会貢献的価値（人材育成、文化的視野、社会化）という4つの上位因子を抽出した（研究5）。論者は、教育価値観の中の伝統主義的価値は一般的価値次元の保守性と支配性次元に、自由主義的価値は平等性次元に、また、自己実現的価値は自律性次元にほぼ対応すると主張する。一方、教育価値観の中の社会貢献的価値は一般的価値次元の中に対応するものが見られず、これは教育価値観独自の価値であろうと指摘する。

第5章では、異文化接触が頻繁な日本語教育場面を取り上げてその特徴を論じたあと、日本人の日本語教師84名を対象に留学生との葛藤経験についてたずねる質問紙調査を行った（研究7）。収集された葛藤事例の内容分析を通して、論者は異文化間葛藤を8タイプ（学生の抗議・主張、授業不参加、教室内規範違反、学習困難、学習意欲の欠如、明白なルール違反、暴力行為、教室場面以外の問題）に分けた。

第6章では、この事例分析をもとに、日本語教育場面における葛藤の原因帰属と解決方略の関連を質

問紙によって検討した。研究3と同じ対象者から得られた反応を重回帰分析によって解析し、葛藤原因を教師要因に帰属させたとき留学生は対決方略を選択し、学生要因に帰属させた場合には協調方略を選択すること、文化要因への帰属は、中国人学生の場合、協調や服従といった宥和的方略を促すなど、原因帰属が解決方略を規定することを見出した。また、日本人教師は学生の対決的反応を予測できないことが多く、これが異文化間葛藤の解決を困難にする一因であろうと論者は解釈している（研究8）。

第7章では、教育価値観と葛藤解決方略の関連を明らかにするために、研究5と同じ対象者に質問紙調査を実施した。葛藤解決方略の選択が自己実現的価値次元、伝統主義的価値次元、自由主義的価値次元、社会貢献的価値次元という包括的価値次元によって影響を受けるかどうか、また、それが学生集団間で異なるかどうかを調べるために階層的重回帰分析を行った（研究9）。その結果、自己実現的価値を重視する学生は、服従、協調方略を選択し、対決方略を選択しない傾向が見られた。また、伝統主義的価値を重視する学生は対決方略を選択することが示唆され、この傾向は韓国人学生に特に強く見られた。さらに、日本人学生でこの価値を重視する学生は、対決方略をとらなかった。

第8章では、研究1～9の研究成果を述べたあと、本論文の研究課題に沿って、得られた知見の解釈と意義づけを試みた。論者が仮定したように、教育価値観は留学生の葛藤反応に影響を与えたが、これは原因帰属など葛藤状況に対する認知あるいは教師に対する期待を変化させることによってであろうと論者は推論する。こうした研究成果をもとに、論者は異文化間葛藤に対する教師の対処方法について数多くの提案を行った。特に、教師自身の教育価値観と学生の教育価値観の違いを認識することの重要性を指摘する。それは葛藤の激化や長期化を避けるとともに、相互理解の増進など葛藤の建設的利用にも有益なものと考えられる。

本論文は、このように日本語教育場面を研究対象に、日本語教師とアジア系留学生の間に生ずる葛藤問題を社会心理学的に解析したものであるが、その背景要因として教育価値観に注目し、その理論的分析と測定尺度の開発にまで及ぶ充実した研究内容をもつものである。論者は、文化的接触、価値観、葛藤解決など多様なテーマを扱いながら、それぞれについて綿密な文献調査を行い、それらを連結して独自の視点を導き、研究枠組の構築をはかってきた。また、アジア系留学生700名余りを含む合計1000名の対象者からデータを収集して高度な統計的解析を実施しており、得られた知見の科学的信頼性は十分に高い。教育価値観の研究は端緒についたばかりで課題も多いが、むしろこれは将来の研究の発展可能性をうかがわせるものと言えよう。

以上のように、本論文は、文化心理学と異文化間教育の両領域において、理論的にもまた実践的にも有意義な成果をもたらし、斯界に貢献するところ大である。よって、本論文の提出者は、博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。